第七講　「藤原家」（『大鏡』　競べ弓／面を踏む）

〈読解練習〉①

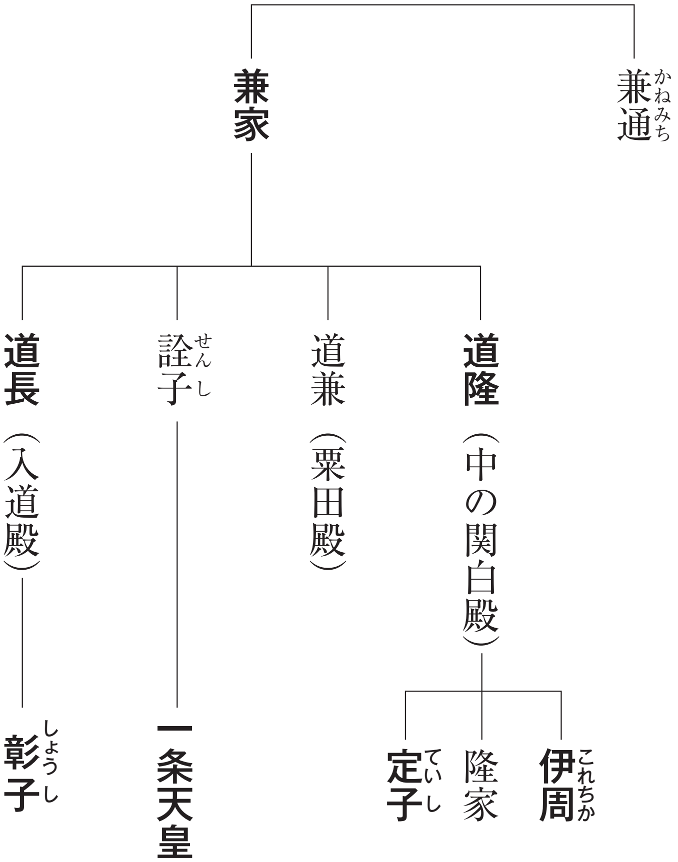
（注）帥殿（そちどの）の、（注）南院にて人々集めて弓あそばししに、（注）この殿渡らせ給へれば、「思ひかけずあやし。」と、（注）中の関白殿思し驚きて、いみじう饗応（きやうよう）し申させ給うて、（注）下﨟（げらふ）におはしませど、前に立て奉りて、まづ射させ奉らせ給ひけるに、帥殿の矢数いま二つ劣り給ひぬ。

（注）
帥殿…藤原伊周（これちか）。藤原道隆の子。道長の甥。
南院…藤原道隆の二条邸内の南にある建物。
この殿…藤原道長。藤原兼家の第五子。五十四歳で出家し、以後「入道殿」と呼ばれる。
中の関白殿…藤原道隆。藤原兼家の長男。
下﨟…ここでは、「官位の低い者」という意味。当時は、道長が伊周よりも官位が低かった。

●あやし【怪し・奇し・異し】
❶不思議だ
❷身分が低い
❸粗末だ

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

★藤原家



© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

中の関白殿、また御前に候ふ人々も、「いま二度延べさせ給へ。」と申して、延べさせ給ひけるを、やすからず思しなりて、「さらば、延べさせ給へ。」と仰せられて、また射させ給ふとて、仰せらるるやう、「道長が家より帝、后立ち給ふべきものならば、この矢当たれ。」と仰せらるるに、（注）同じものを中心(なから)には当たる（注）ものかは。次に、帥殿射給ふに、いみじう臆(おく)し給ひて、御手もわななく（注）故(け)にや、的のあたりにだに近く寄らず、（注）無辺(むへん)世界を射給へるに、関白殿、色青くなりぬ。

（注）同じものを…同じ当たるにしても。
ものかは…強い感動を表す。～ことよ。～ではないか。
故…ため。せい。
無辺世界…見当違いの方向。

●やすし
❶【　　】簡単だ
❷【　　】①安らかだ・心が穏やかだ　②安っぽい

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

また、入道殿射給ふとて、「摂政、関白すべきものならば、この矢当たれ。」と仰せらるるに、初めの同じやうに、的の破（やぶ）るばかり、同じ所に射させ給ひつ。饗応し、もてはやし聞こえさせ給ひつる興もさめて、こと苦（にが）うなりぬ。父大臣、帥殿に、「何か射る。な射そ、な射そ。」と制し給ひて、ことさめにけり。

（『大鏡』）

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

〈読解練習〉②

（注）四条の大納言のかく何事も優れ、めでたくおはしますを、（注）大入道殿、「いかでか、かからむ。うらやましくもあるかな。わが子どもの、影だに踏むべくもあらぬこそ、口惜しけれ。」と申させたまひければ、（注）中の関白殿・（注）粟田殿などは、げにさもとや思すらむと、恥づかしげなる御気色（みけしき）にて、ものものたまはぬに、この（注）入道殿は、いと若くおはします御身にて、「影をば踏まで、面（つら）をや踏まぬ。」とこそ仰せられけれ。まことにこそさおはしますめれ。（注）内大臣殿（ないだいじんどの）をだに、近くてえ見たてまつりたまはぬよ。

（『大鏡』）

（注）四条の大納言…藤原公任（きんとう）。「三船の才」（漢詩・和歌・音楽の才能）の持ち主。
大入道殿…藤原兼家。
中の関白殿…藤原道隆。兼家の長男。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

粟田殿…藤原道兼。兼家の第三子。
入道殿…藤原道長。兼家の第五子。
内大臣殿…藤原教通（のりみち）。道長の子。公任の娘の婿。

●めでたし

❶すばらしい
❷心ひかれる

●くちをし【口惜し】

❶
❷つまらない
❸卑しい

●げに【　　】

❶実際に・なるほど
❷ほんとうに・いかにも

●けしき【気色】

❶様子
❷意向
❸機嫌

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

★『**大鏡**』

ジャンル…歴史物語

成立…平安時代後期

●**紀伝体**。

●**藤原道長**の栄華中心（批判精神もあり）。

●**大宅世継**（おおやけのよつぎ）（一九〇歳）と**夏山繁樹**（なつやまのしげき）（一八〇歳）と**若侍**の三人で会話をして話を進めていく**会話形式**。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第七講　復習問題

①　「あやしの民の竈（かまど）まで…」の傍線部の意味として最も適当なものを、次の中から選べ。

ア　危険な　　イ　挙動が不審な　　ウ　身分が低い
エ　ひねくれた　　オ　考えが卑しい

②　「げにうれしきこと、げにかなしきことならでは…」の傍線部の意味として最も適当なものを、次の中から選べ。

ア　少し　　イ　本当に
ウ　限りなく　　エ　まあまあ

③　「月な見たまひ［A］」の空欄Aには、禁止の意味を表す終助詞が入る。最も適切なものを次の中から選べ。

ア　ばや　　イ　そ　　ウ　なむ
エ　かし　　オ　ぞ

④　歴史物語『大鏡』と最も関係の深い人物を、次の中から選べ。

ア　稗田阿礼　　イ　清少納言　　ウ　藤原道長
エ　鴨長明　　オ　藤原定家

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第七講

〈現代語訳〉

〈読解問題〉①

帥殿〔＝藤原伊周〕が、（藤原道隆〔＝伊周の父親〕の邸内の）南院で人々を集めて弓遊びをなさったときに、この殿〔＝藤原道長〕がお越しになったので、「思いもかけない不思議なことだ。」と、中の関白殿〔＝藤原道隆〕は驚きなさって、たいそう（道長の機嫌をとり）おもてなしをし申し上げなさって、（当時、道長は伊周よりも）官位が低くいらっしゃるが、（競弓の順番を伊周より）前に立て申し上げて、先に射させ申し上げなさったところ、帥殿が射抜いた数が（道長の射抜いた本数よりも）あと二本負けなさった。中の関白殿や、また御前にお仕えする人々も、「もう二本、延長なさいませ。」と申し上げて、延長なさったので、（道長は）心中穏やかではなくお思いになって、「それならば、延長なさいませ。」とおっしゃって、（道長が）また矢を射なさろうとして、おっしゃることには、「道長の家から天皇や、皇后がお立ちなさるはずのものならば、この矢当たれ。」とおっしゃると、同じ当たるにしても的の中心に当たるではないか。次に、帥殿が射なさったところ、たいそう気後れなさって、お手元も震えたからであろうか、的のそばにさえ近づかず、見当違いの方向を射なさったので、関白殿は、顔色が青くなった。再び、入道殿〔＝道長〕が矢を射なさろうとして、「（私が）摂政、関白になるはずのものならば、この矢当たれ。」とおっしゃると、前のと同じように、的が破れるくらい、同じところに命中なさった。（関白殿が道長を）おもてなし、歓待し申し上げなさった興もさめて、気まずくなった。（伊周の）父である大臣〔＝道隆〕は、帥殿に、「（これ以上）どうして矢を射るのか。射るな。射るな。」とお止めになって、すっかりしらけてしまった。

〈読解問題〉②

四条大納言〔＝藤原公任〕が、このように何事も優れ、素晴らしくいらっしゃるのを、大入道殿〔＝兼家〕が、「どうして、あんなにすぐれているのだろう。うらやましいことだ。私の子どもたちが、（大納言の）影さえ踏むことができないのが、残

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

念だ。」と申し上げなさったので、中の関白殿〔＝道隆〕・粟田殿〔＝道兼〕などは、本当に（父は）そう思ってらっしゃるのだろうと、恥ずかしそうな様子で、何もおっしゃらないが、この入道殿〔＝道長〕は、とても若くいらっしゃる身で、「影を踏まないで、顔を踏みつけてやる。」とおっしゃった。（今では）本当にその通りになっていらっしゃるようだ。（公任は）内大臣殿〔＝道長の子の教通。公任の娘婿〕をさえ、近くで見申し上げることもできなさらないことよ。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題　第七講　解答解説

〔解説〕

①　「あやし」は重要単語で、「不思議だ」「身分が低い」などの意味。よって、正解はウ。

②　「げに」は重要単語で、「本当に」「なるほど」などの意味。よって、正解はイ。

③　禁止の終助詞は「な」か「そ」。設問文で「な～そ」の「な」に気づいたら選択肢イ「そ」が選べる。しかも、選択肢には「な」がないことからも、イが正解。

④　『大鏡』は、藤原道長の栄華が中心に書かれている歴史物語である。よって、正解はウ。

〔解答〕

①　ウ　②　イ　③　イ　④　ウ

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。